

て心と身体の錯綜とした構造によって立ち現れる世界を示す。

R は個体の生存とは無関係に存在するであろう R' に対応する世界を示す。

ΔR は R と R' の差で個体が生命体として生存するということですでに持たされる外界との認識のズレを示す。つまり個体が身体という自然物としての感官を通すことによって生ずるノイズと誤差の部分であり、わたしたち人間はある幻想性をもつてしか関係し得ない領域もある。

ΔR とは、わたしたち人間が現実とのズレを補完する意味で生じた観念領域であり、わたしたち人間が過剰に持ってしまった心的領域もある。

ΔR を持つ意味は、個体が生きているということであり、($\Delta R + \Delta R'$)とは人間が現在生きているということである。

以上のような図式から世界史的に見て、東洋思想はわたしたちが不可避的にもつ現実とのズレ ΔR を第一義的なテーマとする志向性を担ってきたといえる。身体を練習で死。さらに死後の世界へと到達しようといった仏教にみられる方法

$$R \rightarrow R' \quad (\Delta R \rightarrow 0) \quad R = R' \quad (\Delta R = 0)$$

は、つまり不可避としてのズレを修正あるいは無くそうすることによって個体と自然の一体化を図ろうとし、そのことによって現世の（生存することによって生まれる）矛盾を除去しようとする態度を意味している。

一方西洋思想は、 ΔR に置き換えられるであろうといった幻想性から生まれた心的領域 $\Delta R'$ に視座をすえ、その観念領域の深化と発展を志向する態度を担って来た。

$$\lim_{R \rightarrow \infty} \frac{R}{R'} = 0 \quad (\because R = C)$$

これは近世に限定していえば、ノイズと誤差の源である自然としての身体のもつ位相 R をカッコ

に入れ、科学に代表されるようなモナド的志向によって世界を包括しようとする態度を意味する。

このように本能を失ってしまった人間の生態を本能に代って律する為に $\Delta R'$ は自立的に生起し、増幅されて行く。

今ここで考察した心的モデルは実際にはこのような静的なものではなく、刻々と $\Delta R'$ を R の中に繰り込みながら R 及び R' は変容を続けるという動的な運動と考えるべきものである。

心的モデルを素材にここまで考察を進めてきてやっと次のことが言える。それは倫理を超えて ΔR （科学的志向性、あるいは近代化）を第一義的なテーマとすることを日本以外のアジアも受け入れなければならないという自覚である。従って、当然のことながら現実 R 及び現実と文化とのズレ ΔR も構造的にますますその錯綜の度合を増す。これは好むと好まざるとにかかわらず疎外領域($\Delta R + \Delta R'$)の拡大を世界は引き受けて行かなければならぬ段階に到ったということを意味している。

今、佛教等、東洋思想への関心が世界的に高まり、特に欧米先進国では科学との接点を模索しあじめているのも、加速度を増す科学的文化($\Delta R'$)はもとより、その噴流を受けつつ変容する自然態としての ΔR も視座に入れなければならないことを強く感じていることにほかならない。世界は自然(R')と文化(R)との二重の乖離($\Delta R + \Delta R'$)をどう平衡させていくかに本気で取り組まざるを得ない時点に立たされたのである。

表現の現場の問題から大分離れてしまったが、表現を成立させている幻想領域（疎外領域）とは他でもない ΔR 及び $\Delta R'$ をいい、この心的領域を掘り下げることは、単なる逃げ場としての表現ではなく、真の意味での自由な表現へと導くものと信ずる。